

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2008

課題番号：18320058

研究課題名（和文） 東アジア圏の歌垣と歌掛けの基礎的研究

研究課題名（英文） Basic Study of “Utagaki” and the Tradition of Song Exchange in the East Asian Sphere.

研究代表者

辰巳 正明（TATSUMI MASAOKI）

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：70054856

研究成果の概要：

東アジア圏の歌垣における歌唱システムを明らかにするために、現在もその形態が残存している東北秋田の「掛唄」行事、南島奄美の「八月歌」行事、さらに中国西南地域の歌垣行事を現地調査し、東アジア文化の中の歌垣の基礎的な状況を理解した。そこから発見された歌のシステムとは「歌の流れ」であり、それは男女の出逢いから別離までのテーマによる歌の展開である。そこに生み出された歌は一定の物語性を形成しつつ、伝統歌詞として伝承されていくことが明らかとなった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	5,900,000	1,770,000	7,670,000
2007年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
年度			
年度			
総計	10,000,000	3,000,000	13,000,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：比較文学・国文学・民俗学・歌垣・歌掛け・万葉集・国際研究者交流・中国

1. 研究開始当初の背景

歌垣における対面歌唱システムの研究は、従来行われることなく、それゆえに歌の発生的研究は、大まかな推論が中心となり、具体的な歌唱のシステムは明らかになることがなかった。ここにいう対面歌唱システムとは、民族の祭祀や労働あるいは社交集會の場の中に、二人あるいはそれ以上の集団が対面して歌唱する形が存在し、その対面歌唱の複

雑な方法を構成しているシステムのことである。一定の定義を求めるならば「ある共通する場において二人ないしは複数の集団が相手と伝統歌詞あるいは即興歌詞によって歌を歌い継ぐシステム」ということになる。

このような対面歌唱システムは日本古代に留まらず広く世界に分布するものであり、東アジア圏においては日本東北地方から南島、そして中国西南地域に顕著に見られる。

古代日本においても各地に歌垣行事の痕

跡が認められ、歌垣に関する民俗学からの研究が多くなされて来た。今後は、そうした民俗行事の研究から、そこに生成した歌々を通して対面歌唱システムを明らかにする研究が求められるであろう。

2. 研究の目的

本研究の主目的は、東アジア圏に形成された歌垣と、歌垣における歌唱システムを、現地調査を含めて明らかにすることにある。

歌垣は、照葉樹林文化圏に現れる古代文化として把握されて来たが、その具体的展開としての歌の生成や歌のシステムについては研究が行われて来なかった。ことに歌垣において歌はどのように唱われるのか、そこにはどのような歌唱システムが存在するのか、それらの問題を日本列島および中国少数民族の事例を取り上げて明らかにするのが目的である。

3. 研究の方法

東アジア圏において集団的に対面して歌を歌唱する折に、一定の歌唱システムが存在することを明らかにするために、以下の三点に焦点を絞る。

- (1) 日本古代文献に見る歌唱システム
- (2) 日本に残存する対面歌唱システム
- (3) 中国少数民族の対面歌唱システム

(1) においては、『古事記』『日本書紀』『風土記』『万葉集』を中心とした古代文献に見られる歌垣や歌掛けの記述および歌表現から、古代日本の歌唱システムを明らかにする。

(2) においては、現在もおこなわれている「秋田県金澤八幡宮伝統掛唄」および「奄美の八月歌」の調査をおこない、その事例から日本に残存する対面歌唱システムを明らかにする。

(3) においては、中国貴州省南部侗族の「大歌」および「行歌坐夜」の調査をおこない、その事例から、中国少数民族の対面歌唱システムを明らかにする。

これらの事例に見られる現代に残る歌掛けの展開と、古代文献にみられる歌掛けのありさまを対照しつつ、東アジア圏の歌垣における基層文化を捉え、その歌唱システムの形成を考察する。

4. 研究成果

本研究の大きな成果は、歌掛けにおける歌のシステムに関する発見である。日本列島に展開した歌垣は、7世紀から8世紀の文字文献から知られるが、資料的限界があつて明らかにすることは困難であつた。しかし、古代日本に『万葉集』が成立し、その多くが恋歌であること理由は、恋歌を生み出した文化的エネルギーに歌垣という民俗的行事が存在したのではないかという仮説が立てられる。その仮説を証明するためにも、現在に遺されている歌垣に類似する事例を日本列島や中国大陸に求めることであつた。

歌垣という行事は、今日の辞書などにさまざま説明されているが、その内容は表面的であり、かつ必ずしも正しい説明とは思われない。そのような欠点が認められるのは、文化人類学の成果のみを踏まえたことによるものであり、文化人類学の報告段階では行事の実態性が重んじられたことによる。また、文学的研究においても日本古代の文献と民俗行事に頼ることで、その限界から抜け出すことが出来なかつたのである。その結果として「歌垣」とは、一つに男女の性的開放、二つに農耕儀礼というところにあり、それが今日に流通している理解となつたのである。

しかし、この歌垣という行事を研究する上で欠かすことの出来ない要素は、歌垣で歌われる歌の内容であり、歌唱のシステムにある。このことに注目する歌垣研究が行われなかつたために、その理解に誤解が生じたのだと思われる。

歌垣には幾つもの種類があり、それは、大の歌垣と小の歌垣に分類出来る。小の歌垣は多くは労働や市場あるいは遊樂の場で行われる。場や時間に制約があり、臨時的なものであるから、社交性の強い歌垣である。それゆえ恋を成就させるよりも労働を癒し、出逢いを楽しむところに目的があり、労働の場ではエロチックな内容が強く入り込む。大の歌垣は年に2回程度の大きな歌垣であり、本格的な歌垣である。こうした歌垣の種類を理解することが重要であり、歌垣を一律に捉えるべきではないのである。このことは歌垣に歌われる歌の性質をも左右する問題だからである。

また、大の歌垣にも①神を楽しませる恋歌、②喉自慢の恋歌、③社交的な恋歌、④恋人を求める恋歌などの種類がある。これらが歌垣の性質を明らかにするものであり、従来の歌垣理解は④のみを対象としていたのである。その④が歌垣のもっとも中心となる歌の場であるからであるが、④においても歌のシステムがあり、それを理解していなければ歌の場に参加することは不可能である。そのシステムとは「歌の流れ」のことであり、男女が

出逢いから別離までのテーマによる歌のシステムが存在するということである。これを中国では「歌路」と呼ぶ。この歌路というシステムは、相手・時間・場・聞き手・雰囲気・歌手の気分などによりさまざまに変化するものであり、常に臨機応変の対応が迫られる。この条件の中で恋歌が展開することから、そこに生み出された歌は一回性のテキストとして成立するものであり、しかも男女の出逢いから別れまでの、一定の物語性を形成することになる。

日本古代に成立した『万葉集』を見ると、ここに明らかにされた恋歌の流れがさまざまに展開していることが知られる。恋の歌は恋歌の流れとして、旅の歌は旅の歌流れとして、宴席の歌は宴の歌流れとして、季節の歌は季節の歌流れとして歌われていたことが知られる。作者未詳の多くの歌々も、この歌の流れとして復元することが可能なのである。

歌垣のこのような性質を明らかにすることから、次に問題となるのは歌垣の歌が形成した日本文化の形成についてである。百濟から受け入れた漢字や儒教の経典を通して日本は東アジアの文化・学問を受け入れ、日本の文化形成を果たして来た。そのような中で奈良時代末から始まる「歌学」という学問は、続いて平安・鎌倉・江戸の各時代を通して展開した。鎌倉五山の文学研究に刺激を受けた日本僧たちは、『万葉集』の訓詁注釈を始めることで、江戸の国学を生み出した。国学の大家たちもこの流れにある。本居宣長の学問も賀茂真淵の教えを受けて和歌への関心の中から形成されたのであり、その根本文献は『古事記』とともに『万葉集』にあった。

このような国学の学問を支えた歌学は、日本が根幹とした学問の伝統であったのである。それは古代の歌垣に出発した歌の歴史の上に成立した学問であり、『万葉集』へと回帰することで国学の成立があった。こうした歌学を中心とする日本文化研究を、改めて「日本学」と呼ぶことが可能ではないか。日本のさまざまな文化形態を分析すると、その背後に和歌の伝統があり、また『万葉集』の伝統へと至り着くのである。本研究における歌垣研究は、日本学が形成される一つの道りを明らかにすることであり、ここに大きな課題が残されているといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①辰巳正明、「貴州省南部侗族の大歌とその儀礼的性格」、『國學院雑誌』、第108巻第6号、P1~P13、2007年、査読有
- ②呉定国、「侗族民歌対唱形式の種類と韻律」『國學院雑誌』、第109巻第2号、P13~P26、2008年、査読有

[学会発表] (計4件)

- ①城崎陽子、「日本古代の歌謡と『対面歌唱システム』の構築」、全国大学国語国文学会、2007年12月2日、於盛岡大学
- ②舟木勇治、「貴州省南部侗族における薩歳の祭詞の性格」、國學院大學國文學會春季大会、2008年6月29日、於國學院大學
- ③城崎陽子、「Singing Face-to-Face :Reinterpreting Ancient Song via Contemporary Utagaki」 12th EAJS International conference in Lecce, Italy; 2008.9.22 Salento university
- ④舟木勇治「中国貴州省南部侗族の祭祀と祭詞—薩歳の祭り調査報告—」、平成二十一年度上代文学会・古事記学会合同大会、2009年5月23日、於國學院大學

[図書] (計2件)

- ①辰巳正明、笠間書院、『折口信夫 東アジア文化と日本学の成立』、2007年、524P+8P
- ②辰巳正明、新典社、『歌垣—恋歌の奇祭をたずねて』、2009年、159P

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辰巳 正明 (TATSUMI MASAOKI)
國學院大學・文学部・教授
研究者番号：70054856

(2) 研究分担者

青木 周平 (AOKI SHUHEI)
國學院大學・文学部・教授
研究者番号：50146734

小川直之 (OGAWA NAOYUKI)
國學院大學・文学部・教授
研究者番号：30265954

花部英雄 (HANABE HIDEO)
國學院大學・文学部・准教授
研究者番号：40383989

田畑千秋 (TABATA CHIAKI)
大分大学・教育福祉科学部・教授
研究者番号：60264321[期間 2006-2007 年度]

廣田律子 (HIROTA RITSUKO)
神奈川大学・経営学部・教授
研究者番号：70260990[期間 2006-2007 年度]

城崎陽子 (SHIROSAKI YOKO)
國學院大學・文学部・兼任講師
研究者番号：20384000

(3) 連携研究者

田畑千秋 (TABATA CHIAKI)
大分大学・教育福祉科学部・教授
研究者番号：60264321[期間 2008 年度]

廣田律子 (HIROTA RITSUKO)
神奈川大学・経営学部・教授
研究者番号：70260990[期間 2008 年度]

(4) 研究協力者

鄧敏文 (DENG MINWEN)
中国社会科学院・少数民族文学研究所・研究員

吳定国 (WU DINGGUO)
貴州民族学院・客員教授